

---

# 436Hz ノスタラジヲ

維川 千四号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

436Hz ノスタラジヲ

### 【Nコード】

N3731N

### 【作者名】

維川 千四号

### 【あらすじ】

近所の公園には、ある噂がある。      ゴスロリ僕っ子で、モデルみたいな美人で、なのにホームレス。      そんな嘘みたいな人物が住んでいるという噂が。

「ありや、先客が居たとは」

扉を開けた彼女が驚いてそう言うと、少女はそれ以上の驚きでビクリと身を竦ませた。

「いやあ、此処は僕だけが知っている』とっておき』だと思っっていたんだけどなあ」

彼女が後ろ手に扉を閉める。そして、ゆっくりとした足取りで少女に近づく。

「でも駄目だぞ、此処は本来立ち入り禁止なんだから　　って完全に部外者の僕が言える台詞じゃないか」

あはははー、と彼女はどこまでも明るく笑い放つ。

「……あ、あのっ。誰、ですか？」

小さく縮めたままの身体で、少女はようやく口を開いた。質問を口にした。しかし、その目には未だ恐怖とも言えるような驚きが宿っている。

「僕？　って此処には僕と君しか居ないか」

むしろ夜の学校の屋上に二人も居る方がおかしいけどな。

「僕はラジヲ。職業は夢と希望溢れるホームレスだよ」

よろしくね、と満面の笑みで彼女　ラジヲは言った。

端正な顔立ちに、誰もが羨ましがするような大人のスタイル。それを綺麗にカールした艶やかな金髪と、白とピンクで統一されたフリフリのコスロリ調の服が飾り立てている。その姿はまるで、等身大になった人形のようなだった。

「ラジヲ、って公園に住んでるっていう噂の？」

「そうそう、それぞれ。いやあ、僕も中々有名になったもんだなあ」

ラジヲはニコニコとそう言いながら、厚底のブーツで一歩一歩確実に少女に歩み寄る。しかし、

「あの！……ここで、何してるんですか？」

少女の言葉に足を止めた。今はこれ以上近づいてはいけないと、その雰囲気判断した。

「ん？ 今日、花火大会でしょ。だから見に来たんだよ。この辺りで一番高い建物は此処だから」

僕、どうにも人混みが嫌いだし。

「で、君は此処で何しているのかな？ その格好から言えばこの学校の生徒さんだろうけど、まだ夏休み中でしょ？」

「……言いたくありません」

この学校の制服を着た少女が、とても小さく言った。その身体は微かに震えているようにも見える。

するとラジヲは「そっか、それじゃあ仕方ないや」と笑みを絶やさず言った。

「ところで、今何時分かる？ 僕、時計も携帯も持ってなくてさ」

「……七時五十二分、です」

少女は、自分の足元の携帯電話を拾い上げてそう答える。その際、一緒に下の白い封筒も拾い上げていた。携帯電話という重りが無くなり、風で飛んでしまわないように。

すると、それを聞き「ん、有難う」とラジヲ。そして続けて、

「じゃあ、さ。花火大会が始まるまでの八分、話し相手になつてくれない？ 君の貴重な時間を、僕にくれないかな？」

お願い、と両手を合わせて頭を下げる。

しかし、すぐさま少女の答えは帰ってこない。

空はまだ少し明るい、とても静かな夜。どこかの誰かの楽しげな声が、遠くから聞こえる。

「……分かりました」

少女は何か観念したようにそう言った。そしてその言葉に頭を跳ね上げ、ラジヲは煌めく瞳を少女に向け、

「本当？ やった、嬉しい」

子どものように屈託なく、口角も跳ね上げる。

「じゃあじゃあ、早速僕の隣に来てくれないかな？　いつまでもそんな端っこに居ないでさ」

おいでおいで、と手招きするラジヲ。

それを見て、重い足取りながらも歩き始める少女。フェンスも何も無い屋上の隅から、ようやくその身体は離れた。しかしその手には、大事な封筒が今もしっかりと握られている。

「はい、どうぞ」

残念ながら、立ち入り禁止の屋上にベンチなどはない。だから白いフリルのハンカチを素っ気ないコンクリートの床に敷き、少女に座るよう促すラジヲ。そして自分はその隣に、スカートが汚れることもまるで気にする素振りもなく座った。

ややあって、少女もハンカチの上に座る。それで、厚底のラジヲと殆ど同じ視線となった。

「そういえば、今日で夏休み終わりだよね？」

徐々に暗くなっていく空を見上げながら、ラジヲが訊く。

「……はい。明日から、また学校が始まります」

握った封筒とハンカチの白に視線を落とし、少女が答える。

「……僕ね、学校大っ嫌いでさ。実はあんまり行ってないんだよね」  
「……………」

「だってさ、話が全然合わないんだもん。皆が仲間だとか友達だとか言っているのが、正直意味分からなかった。そんな上辺だけの関係なんかには、何の興味も持てなかった」

今思えば若かったのかなあ、とラジヲは柔らかく笑った。

「……それで」

と、口にしたのは少女の方だった。その目はオドオドとしながらもラジヲの顔を見ていた。

「それで、ラジヲさんはどうしたんですか？」

「辞めちゃった、きれいさっぱり。そんなことで悩んでいる時間が勿体なかったから」

「……………後悔、しなかつたですか？」

「したよ、いっぱい。それから社会からもドロップアウトしちゃったから、もう後悔の連続」

でもさ、とラジヲは言葉を続ける。

「後悔しない人間なんて居やしないんだよ。いつも最善の選択なんて到底無理な話なんだよ」

だからさ。

「そんなことするより『自分はこれで良かったんだ』って思えることを見つけておきたんだ。後悔を覚えているより、正解を喜ぶことにしたの」

「……それで、幸せになれましたか？」

少女が訊いた。しっかりとラジヲを見て訊いた。

すると、クスリと笑って、

「そんなの分かんないよ。だって、まだまだ途中だもん。人生の最期になって初めて、それを採点できると思うから」

ラジヲは、脚をバタつかせて遊びながら答える。

「そしてそのとき、平均点より一点でも上にいくのが僕の夢。だから目一杯、自分の好きなことをしてやるの。誰にも邪魔はさせやがない」

「……………」

「そして最後の最期に『ああ、そんなこともあったなあ』って後悔したことを笑ってやるんだ」

そう言って、今までで一番の笑顔でラジヲは少女の瞳を見た。

「……………」ラジヲさん、実は私ね

しかしそんな少女の告白は、大きな音にかき消された。

「おお！ 始まったね、花火大会」

勢いよくラジヲが立ち上がる。

「……………」そう、みたいですわね」

少女も遅れて立ち上がる。

するとそれとほぼ同時に、色とりどりの光が暗い夜空を鮮やかに染め上げた。

そして続いて、心の奥底まで響くような音が響く。

そんな光と音の連鎖が、この学校の屋上にも届いていた。

「花火つてさ」

花火のキャンパスを見つめながら、ラジヲが静かに、だけど確かに言った。

「長い長い時間を掛けて作られたのに、一瞬で消えちゃうんだよ」  
光で赤く染め上げられたその顔は、どこか悲しそうで、でも嬉しそうなのもする。

「でも、その一瞬で皆を振り向かせる。すぐに忘れられてしまうかもしれないけど、それでも皆の心に存在を表現する」

だから、君はさ。

「まだ輝ける瞬間に出会ってないだけなんだよ」

黄色い光を背中に浴び、ラジヲは笑った。

逆光の最中でありながら、少女には確かにそう見えた。

「帰って焚き火をしようかと思っただけで、何かよく燃える物……例えば紙とか持ってない？」

花火が全て散った本来の夜空の下、ラジヲは訊いた。

「……これ、良ければ使って下さい。私はもう必要ないんで」

少女は手に持った白い封筒を渡す。

それを受け取ったラジヲは「ん、有難う」と満足そうに笑った。

「それじゃ、また何処かでね」

そう言っただけで屋上の出入り口に向かい、扉に手を掛けたところで、

「あ、ちなみに此処で僕に会ったことは他言しないでもらえると助かるな。一応れっきとした不法侵入者だからさ」

可愛らしく舌を出すラジヲ。

そして、その姿が屋上から校内に入った瞬間、

「あ、あのっ。ラジヲさん！」

と、少女が呼び止めた。そして、

「ありがとうございます！」

初めて、笑顔を見せた。

それをしっかりと見届けると、

「ラジヲはラジヲらしく、言いたいことを言っただけだよ」

噂のゴスロリ僕っ子モデル美人ホームレスは公園へと帰っていった。

(後書き)

以上、よく分からないお話でした。

苦情等は、是非とも感想にお書き頂ければ幸いです。

では、ここまで読んで下さった貴方に最大級の感謝を！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3731n/>

---

436Hz ノスタラジヲ

2010年10月8日13時54分発行